

一宮館主賞

愛知県／77歳／男性／無職

やまだ かずひこ

山田 和彦様

✉手紙の相手：父

父さんのリヤカー

父さんが亡くなって、早いものでもうすぐ五十年が経ちます。孫も六人となり家族皆元気で過ごしています。

先日、物置を整理していたら、古いリヤカーが立てかけてあり、長い年月を物語るように、タイヤは空気の抜けた状態で、鉄の部分はかなり錆びておりました。

父さんは財務局に勤める公務員でしたが、ネクタイ姿より百姓姿がよく似合っていましたね。荷台に肥桶を左右に積み、臭いまき散らしながら畑に運んでいました。近所では専門の汲み取り業者が入っていましたが、父さんは近所の子供たちに、臭い臭いと言われながら、力一杯自転車ペダルをこいでいました。夏の収穫時季になると採れた西瓜をリヤカーに乗せ佐奈川の土手を何度も往復しましたね。沈む夕日が父さんの背中を照らし、西瓜と

一緒に乗っていた私は父さんの背中がとても遅しく感じ、近所の子供たちが集まってくる中、自慢にさえ感じていました。

更には、小学校のころ百日咳にかかり、私を毛布に包み、病院に運んでくれたのもこのリヤカーでした。今振り返っても、父さんはいつも何かを載せて運んでいた記憶が心に残っています。

先日、妻から「使わなかったらリヤカーを処分したら」と言われ、かなり迷いましたが、先日、思い切って友人から借りた軽トラックで市の廃棄物処理センターに持っていきピット（濠内）に投入してきました。中をのぞくと、多くの古い自転車や三輪車に囲まれ、父さんのリヤカーだけが、別れを惜しむように、わずかにカチャカチャとタイヤが回っていました。

父さん。リヤカーがもうすぐ父さんに会いにいきます。会ったら一言「苦勞さま」と声をかけてやって下さい。

✧手紙への想い✧

父が大切にしていたリヤカーを処分した時の気持ちと、リヤカーには数々の思い出があり、その想いを書きたいと思いました。